



CONTENTS

社長就任のご挨拶	1	会員企業紹介	5
地域社会とともに歩む人文学部へ	2	三重 T L O 技術移転および特許情報	6
三重大学知的財産統括室の活動	3	科学技術振興センター視察会	7
研究室紹介	4	知財セミナー報告 / 催し物行事案内	8

社長就任のご挨拶

㈱三重ティーエルオー

代表取締役社長 円城寺英夫



今年6月末の取締役会と株主総会で代表取締役に選任され、徳田前社長を継ぎ社長に就任いたしました。

本来ならば、会員企業・団体の皆様や、株主の教官・研究者の方々には、直接にお会いしてご挨拶をすべきところではありますが、それはごく一部にとどまってしまうと、改めてこの紙上をお借りし、ご挨拶と思考の一端を申し上げる次第であります。

株式会社三重ティーエルオーは、独立行政法人としての大学の、教育・研究につづく3つ目の使命である社会貢献・連携に対して、その活動の一端を、特に研究成果・技術の移転という側面から支援活動を行うことにより、地域圏の産業・経済の発展・共栄に寄与する、ということを理念の中心に据えて設立されました。

またその役割を具体的に言えば、まずは特に当社の活動を支援して下さる会員企業・団体を中心に、研究・開発部門・企画部門などで活動されている担当の方々や、学内で研究・開発を行っている大学の教官・研究者などに対して、技術移転・共同研究・研究交流・技術指導・情報交換などの諸活動が円滑に進捗進展するよう支援・後押しをする、ということになりましょう。このような観点から会員企業・団体に対する種々のサービス事業や交流事業も行っておりまして、5年目を迎えたという処です。

そこでこのような立場から、当社を取り巻く情勢と今後の展望について、“SWOT分析”風に状況分析を致し、簡単にその認識を述べてみますと、次のようになりましょうか：

外部環境として、国の第3次科学技術基本計画はすでに本年スタートし、5年間で25兆円を支出して産学官連携活動などに対する色々な面から種々の支援策は引き続き実行される（“機会”）一方で、当社にとっては経済産業省からの5年間の助成金は今年度で終了し来年度から“自力”経営に移行するという厳しさ（“脅威”）が待っております。

また内部環境としては、未発掘の大学の技術シーズ（潜在的なものも含め）の質・量、ならびに会員になりうる県内の企業・団体の数、などがまだまだ多くあるという潜在的有利性（“強み”）がありますが、その一方、TLOを含め、取り巻く大学組織全体の産学官連携機能において実際の連携プレーその他の面で、改善点や非効率な部分も見受けられること（“弱み”）などの課題があります。

このような認識から来年度以降の状況展望も踏まえますと、今後実行すべき点としては、組織の効率的運営を目指すとともに、上記の“強み”を意識して、研究・技術情報の収集量を増やすとともに、今まで以上に会員に対する“キメ”細かいサービス事業項目を増やすことが必要であると考えています：

例えば、新鮮な技術・研究情報の提供、研究会・講演会の動向連絡（e-mailなど活用）、技術開発補助金申請などへの支援（書類作成指導）、就職関連情報の提供 などなどです。

現在は、上記の活動を行うための仕組みづくりに着手しているところではありますが、その一方で、会員の方々や地域圏の諸ニーズに対する当方の認識・把握力をまだまだ向上する必要があるとも反省しております。

皆様からこれらに関する色々な提言・アドバイスを気楽にお寄せ頂くこととともに今後とも引き続き、三重ティーエルオーに対して、益々のご愛顧とご鞭撻を切にお願い申し上げます。

ご期待とご要望に沿うべく力を尽くす所存であります。

地域社会とともに歩む人文学部へ

人文学部長 井口 靖

人文学部は1983年に、三重大学にとっては初めての純粋な文化系学部として設置されました。人文学部と称していますので、地元や高校の方でも文学部と誤っていらっしゃる方がたくさんあるようですが、実は哲学、歴史、文学、言語、地誌、社会学など人文科学系の文化学科と法律・政治・経済・経営を学ぶ社会科学科から成り立っています。

2004年に三重大学も国立大学法人となり、独自に運営していかなければならなくなり、より一層地域との連携が求められるようになりました。いや、もはや地域と一体化することなしには、大学の存在自体も危うくなる時代に入ったというべきでしょう。人文学部は従来から公開講座や自治体の審議会への参加などで、一部の教員による地域連携は行ってきましたが、今後は学部をあげているような方法で地域との連携を図っていこうと思っております。

その新しい試みのひとつが「公開ゼミ」です。これまで公開講座としてリレー式の講義は開催していましたが、昨年度からはさまざま科目を設けて、それを少人数で受けただけのようにしました。今年は10のゼミ(それぞれ3回授業)を開講しています。また、出前授業として、100を超えるメニューを用意しており、ご要望に応じて高校に出向いて大学の授業を体験していただいています。社会人の方の入学や特定の科目だけ受講する科目等履修生を数多く受け入れているのも、人文学部の特徴です。

研究面での地域連携としては、2004年に開設した人文学部研究センターをあげることができるでしょう。伊勢湾・熊野地域研究センター、多文化共存研究センター、社会動態研究センター、総合環境研究センターで、現在16のプロジェクトが活動しています。そのうち、古代中世伊勢国の総合的研究、伊勢・伊賀地域における文学資料の調査、伊勢から熊野へ - 文化比較のための基礎研究 -、日系ブラジル人・ペルー人の教育・生活環境に関する調査研究、地域社会と法、地域協働・地域福祉から見た新たな公共

像の構築、市民参画型総合計画立案支援プロジェクト、四日市学、伊勢神宮蔵の世界地理情報に関する基礎的研究、伊勢茶の栽培・生産に関する環境科学的研究などは地域と密接に関係したプロジェクトです。

学問をさらに深めるために、人文社会科学研究所という大学院も設置されています。ここには、おそらく全国的に見てもユニークだと思われる「三重の文化と社会」という科目が置かれています。これは、院生が特定の地域を定めて、その地域において課題を発見し、研究を行い、最後に現地で発表会を行うというものです。今年も鈴鹿市が対象になっており、自治体や地元のみならずのご協力を得ながら研究を進めております。また、研究科として地域交流誌TRIOという雑誌も発行しており、「三重の文化と社会」の成果を紹介しています。

このように人文学部は地域との連携を深めてはおりますが、産業界とはまだ接点が限られています。それでも、三重TLOのご協力で、熊野古道センター用生活誌(石造物の伝承等調査)、ケーブルテレビ局におけるマーケティング手法の開発・研究と検証、地盤改良工事のマーケティングと地盤改良機の合理化に関する調査研究などの仕事をさせていただいている教員もおります。

人文学部は今後もいろいろな分野で地域の方々と共に歩んでいきたいと思っております。



❖❖新しい段階に入った三重大学の知的財産活動❖❖

三重大学知的財産統括室 助手 狩野 幹人

1. 2年半を振り返って

法人化とともに様変わりした大学のシステムの一つとして、教職員の発明の取扱いが挙げられる。法人化以前も教員が発明を行うことは珍しくなかったが、出願人（＝権利を有する者）は教員個人または共同研究先の企業になっていた。法人化以後は、教員の発明は機関管理（原則として機関帰属）となり、大学が出願人（または企業等との共同出願）となることで、単願特許等がライセンスされる、あるいは共同出願企業が実施した際には大学にライセンス料または実施料が入る。

このような背景の中、平成 16 年 4 月に知的財産統括室が設置された。同時に「知的財産管理アドバイザー派遣事業」（特許庁）にも採択され、6 月には知的財産管理アドバイザーの飯野顕客員教授が着任された。9 月には狩野が専任助手として着任し、森野捷輔室長（理事・研究担当副学長）のもと、飯野アドバイザーと狩野との二人三脚での活動を開始した。平成 18 年 4 月からは NEDO 養成技術者の井沼崇氏が加わり、三人四脚にて更なる活性化を図っている。

主な活動は 教員および大学院生に対する知財意識啓発、ポリシー、規程の整備を始めとするルール作りとその運用 である。 については、各学部へ出向いての Mip（Mie intellectual property）特許塾、共同研究・受託研究を行っておられる（産学官連携に関心のある）教員（研究室）への訪問、および日々の発明相談等の「草の根活動」が挙げられる。特に、Mip 特許塾については、単なる座学ではなく、特許文献の検索、受講者自らの明細書の作成、および弁理士（客員教授）による明細書添削という、より実践的内容を「売り」としている。

また、平成 17 年度からは、県内中小企業にて研究・開発に従事されている方々にも門戸を開放するとともに、平成 18 年度からは「弁理士合格講座（計 4 回）」もコンテンツに加え、三重県内の知的財産中核人材育成を目指している。 については、平成 16 年 4 月 1 日制定のポリシーおよび規程を改正した他、有体成果物取扱規程を新規に制定した。これらの規定には、職務発明に関する取り決め、著作権の取扱、学生の発明に関する取り決め、および守秘・管理等を明示しており、他大学と比較してオリジナリティの高いものとなっている。

啓発活動や法人化後の知的財産に関するルールの浸透の結果、三重大学が権利を有する特許等の出願件数は順調に増加しており（図 1）、毎年度 50～60 件の出願を見込める状況にある。また、平成 17 年度特許登録件数 8 件は、全国の大学の中で

第 10 位にランキングされている（特許庁資料より）。一方で、平成 12～17 年度の発明者人口（発明者となった教員数）82 名は、理系教員数（410 名）の 20% であり、さらなる発明者人口の拡大および教員の知財意識高揚のため、啓発活動を継続していく予定である。

2. 地域での活用に向けて

出願件数が増加している一方で、平成 17 年度ライセンス等による収入は 171 万 5 千円と、多くの民間企業と同様、知的財産だけではコストセンターとなっているのが現状である。

三重大学の特許出願件数の特徴として、3分の2が企業等との共同出願（この場合、相手の企業が独占的に実施）残りの3分の1が大学単独の出願である。地域圏大学としては、是非ともこれらの三重大学単独出願の特許を三重県内の企業にご活用（特許を核にした共同研究、さらにはより発展的な特許の共同出願を含む）いただき、大学に少しの「お布施」を還元していただくことを期待している。そのためには、技術移転機関の（株）三重 TLO はもとより、創造開発研究センター社会連携部門とのより強固な連携が課題となる。また、三重県内の知的財産中核人材育成も重要な課題であり、Mip 特許塾をより充実した内容に発展させていく予定である。同時に、三重県の関係各所の益々のご支援とご協力をお願いしたい。

以上のような三重県内企業、三重県、および三重大学が一体となった知的財産に関する取組として、10 月 26 日に知的財産活用シンポジウム「大学等の知的資産を核として三重県産業の振興を考える」を三重大学にて開催したところ、産官学から 115 名のご出席をいただいた。このシンポジウムがキックオフとなり、三重県全体の知的財産が活性化することを期待している。

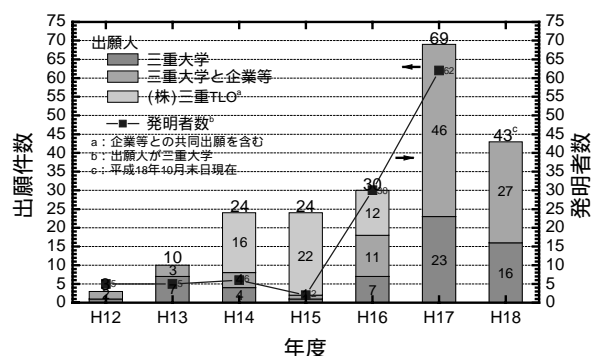


図 1 三重大学の特許等出願件数の推移

◆ 研究室紹介 ◆

三重大学教育学部生涯教育

助教授 磯部 由香

本研究室では食品中の一般成分および嗜好成分分析、官能評価、および機能性に関する研究を行っています。主な研究テーマを以下に紹介します。

< 農産物に関するテーマ >

- ・赤混黒米：平成2年頃から約10年間、明和町五木宮歴史博物館において、古代米の伝承を目的として栽培されていた有色米である赤混黒米の色素成分について、調理・加工による変化について解析するとともに、抗酸化性・抗変異原性などの機能性について、検討を行った。
- ・フェイジョア：一時、日本での栽培が行われた果物で、現在は商業ベースでは栽培されていない。一般成分、嗜好成分についての分析、抗酸化性、発ガン物質吸着能についての検討を行った。
- ・アテモヤ：近年、三重県においてみかんの代替作物として栽培の促進が行われている果物である。一般成分の分析、ポリフェノールの分析、抗酸化性についての検討を行うとともに、加工食品への応用も試みている。
- ・ツタンカーメンエンドウ：加熱により赤く着色する色素を含有するエンドウであり、家庭栽培のレ

ベルで利用が広がっている。一般成分の分析、ポリフェノールの分析、抗酸化性についての検討を行うとともに、餡への応用を試みている。

< 発酵食品に関するテーマ >

- ・三重県産を中心とした発酵食品の微生物相の解析を、生物資源学部との共同研究により行っている。これまでにとりあげた試料としては、あゆ、このしろ、さば、さんまのなれずし、塩辛などである。また、発酵食品から乳酸菌を分離し、耐酸性を持つプロバイオティクス乳酸菌や、-アミノ酪酸(GABA)などの有用物質を生成する乳酸菌の検索を行っている。



培養機器

三重大学生物資源学部 生命圏生命科学科
 水圏生物生産学講座 水産物品質学研究室
 助教授 青木 恭彦

最近、食の安全についての関心が高まっており、連日のように関連する事柄が報道されている。本研究室は平成元年に「水産物保蔵学」から「水産品質管理学」に名称変更され、さらに「水産物品質学」に変更されたが、当初から一貫して食品の品質保持、それに関わる衛生管理をテーマに研究を行ってきた。

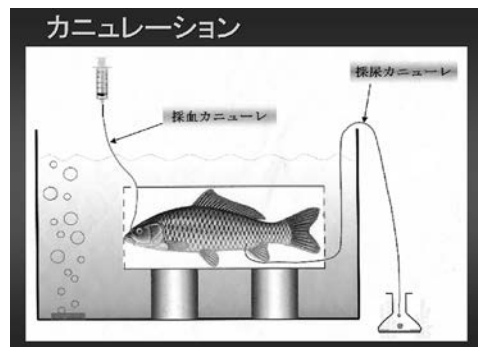
しかし10年前までは社会の関心もそれほど高くなく、研究内容が必ずしも認知されていないのが実状であった。それが1996年のO-157食中毒事件とBSE問題の発生により状況は一変し、今日のように社会の関心を集める事となった。

本研究室では、メーカー側の知見を科学的に検証したり、衛生管理の方法・分析手法のアドバイスを行っているが、それとは別に魚の品質の基礎的知見を得るために、以下のような研究を行っている。

1. 魚肉の軟化要因を確定して品質管理に応用するための、魚肉内タンパク質分解酵素と筋肉への作用の研究
 - ・本研究の結果、筋肉中のリソゾームに含まれるカテプシンLが死後漏出して筋原繊維に作用する結果、自己消化が生じる事を明らかに

した。さらに、海産赤身魚にカテプシンLが多いため自己消化が生じやすい事も分かった。

2. 養殖で使われる水産用医薬品の魚体内の分析によって、安全な使用指針を確立するための各種合成抗菌剤の分析手法の開発および薬物動態に関する研究
 - ・本研究の結果、各種水産用薬物の養殖魚における薬物動態を明らかにした。それにより、養殖現場で水産用医薬品の安全で有効な計画的投与が可能となった。
3. 魚類血液中成分の生理活性を探索・同定して、魚類の衛生管理や腐敗防止に応用する研究
 - ・本研究の結果、コイ血液中に各種の機能性成分がある事を明らかにした。



魚に薬物を投与後、生きたまま血液や尿を採取して分析を行う方法

◆ 会員企業紹介 ◆

株式会社三鈴エリー

〒510-0886 四日市市日永東3-8-13
TEL:0593-45-8952 FAX:0593-49-0123
<http://www.misuzuerie.co.jp/>

当社は、1976年6月に創業し、今年30周年を迎えました。

私たちは、創業以来「常にお客様の立場でスピーディーに行動する」をモットーに、地域に密着したサービスで、化学・食品や薬品業界をはじめ、自動車や電気・電子業界など、幅広い業界から高い信頼と評価を頂いています。

コアとなる4つの事業は、
電気事業

【お客様に信頼と安全をお約束する電気設備の提供】
計装制御事業

【お客様の生産性向上に寄与する最適制御システムの提供】
情報電子システム事業

【一味違ったキラリと光るシステム構築】
検査装置事業

【長年蓄積した技術とノウハウが生んだ欠陥検査装置】
これらの技術を融合させることにより、お客様の幅広いニーズにお応えします。

また、どの事業も、企画から設計・施工・メンテナンスまでの一貫した体制と技術を持っており、いずれのビジネスフィールドからもアプローチが出来るトータルサービスを特長としています。

イノベーションの時代。常に新しいものに対して、挑戦していく時代です。

こうした時代においては、地域における産学官連携活動が、ますます重要になってきます。

私たちも、その一翼を担うべく、新しい価値や成果を創造し、お客様のお役に立てる「信頼されるソリューション企業」として認知されるべく、たゆまぬ研鑽を続け当社独自の技術と発想に磨きをかけてまいります。



ニュートリー株式会社

〒510-0013 三重県四日市市富士町1-122
TEL 059-331-0727 FAX 059-331-3848
<http://www.nutri.co.jp>

当社は昭和38年2月、三協製薬工業株式会社として設立し、平成18年5月に「Nutrition(栄養療法)」の「New history(新しい歴史を築いていく)」という意味を含め、ニュートリー株式会社に社名変更しました。

栄養療法は、患者様の入院期間をはじめとして、経済負担の軽減、さらには患者様と家族のQOL(Quality Of Life)向上の実現にもつながります。急速に高齢化社会が進む今後の日本にとって、栄養療法の浸透は社会的な命題と言っても過言ではありません。当社は、こうした栄養療法への高まるご期待に、既成概念にとらわれない自由な発想力とチャレンジスピリッツで、しっかりお応えしていきます。もちろんすべての商品について、最新データとの整合性も追及し、お客様に安心してお使いいただける高い信頼性確保にも努めてまいります。

当社は「嚥下障害」「栄養素補給」「病態別栄養素補給」の3つの注目領域を中核とした商品展開を病院、施設向けに行っております。「嚥下障害」は高齢や脳卒中の後遺症などで生じます。しかし、「食べることができる楽しみ」は患者様の生命力の保持・活性化につながる重要な要素です。そこ

で新たな着眼点から嚥下食の改善と改良に取り組み、患者様のQOLの向上実現を目指しております。

対応食品としては、粉末食品「ソフティア」(とろみ食用、ゼリー食用、流動食プディング用) 特別用途食品(そしゃく・えん下困難者用食品)の「アイソトニックゼリー」があります。

「栄養素補給」は特に高齢の方は栄養摂取のバランスが少し崩れただけでも、浮腫や貧血、脱水、便秘などを起こして健康を害することがあります。的確な栄養素補給によって、すべての人が持つ自然治癒力を最大限に引き出すことを目指しております。

対応食品としては、12種類のビタミンと4種類の微量元素を補給できる「ブイクレス」、濃厚固形食の「アイオールソフト」があります。

「病態別栄養素補給」は患者様の病態や栄養状態の特徴にもとづいて、適切な栄養管理を行うために必要なサプリメントをラインナップ。専門的、かつ計画的な栄養療法の最前線に導入していただける、いずれも科学的根拠にもとづいた商品を目指しております。



三重TLOにおける技術移転および特許情報

平成18年3月～平成18年10月期間の、三重大学及び三重TLOからのご紹介特許は以下に示すとおりです。なお、これ以外にも、企業との共同出願が、バイオ関係5件、電気・電子関係3件、材料関係8件でした。又、特許の技術移転も順調に進行しており、現在30件（実施契約、オプション契約、権利譲渡の合計）となっています。

1. 三重大学及び三重TLOの出願特許の概要（H18.3～H18.10）

分類	「名称」	用 途
材料・機械	「全固体リチウム電池用正極剤」	硫化物系の超イオン伝導結晶体である thio-LISICON を電解液として、又この電解液と相性の良い正極活物質として硫化ニッケルを用いた全固体リチウム電池用正極剤である。自動車用電池、蓄電池等の大型2次電池に好適に用いられる。
	「新規微生物電池」	多孔質炭化物を負極とし、該担体に寄生する微生物により糖類を分解して電子を取り出す電池であって、上澄み水部に配設された正極を酸化することにより、正極から強制的に電子を取り出すシステムである。これにより、従来の微生物電池の発電効率を3倍以上向上できる。
電気電子情報	「モーターの振動抑制方法」	モーターフレームの振動は、多数の周波数成分からなるため、短時間に振動を抑制することは困難であった。本発明は、モーター回転時に発生する振動成分を検出し、全ての振動を抑制できる複数のパラメータを決定し、これを制御系へ一括してインプットすることにより、振動を短時間に同時制御する。
バイオ	「イミダゾキナリン化学発光物質およびその製造法」	活性酸素の一つであるスーパーオキシドアニオンの反応により発光が誘起され、光シグナルとして検出する発光物質である。生体内のスーパーオキシドアニオンを検出することにより、疾病の診断あるいは疾患の研究に用いることができる。
	「バクテリアージ由来スーパーGタンパク質5量体及びその製造方法」	大腸菌C株の増殖を抑制したり、検出したりできるスーパーGタンパク質5量体であり、バクテリアージ X174由来である。該タンパク質のC末端にヒスチンタグを付けてタンパク質を培養し、5量体のGタンパク質を効率的に生産する。
	「エゾウコギ抽出物を含有する体重増加抑制剤」	エゾウコギの表面部を炭化させ、適切な溶媒を用いてエキスを抽出する。抽出液を比重差により分液し、一部の抽出液からカフェ酸誘導体を含む成分を取り出し、体重増加抑制剤とする。
	「アポトーシス誘導剤」	大黄根茎からの抽出液を精製してラボンチンを得、アポトーシス誘導剤として用いる。植物由来のアポトーシス誘導剤であるため安全性が高く、食品又は医薬品に調合し、胃ガン等の消化器系悪性腫瘍の治療に用いることができる。
	「焼酎カスを用いた藻類培養法」	焼酎カスの処理により得られる有機酸に富んだ抽出液を機能食品である微細藻類スピルリナの培養に用いる方法であり、廃棄物を有効利用する。これにより、焼酎製造コストを下げることが可能となる。

以上に関するお問い合わせは、下記までお願い致します。

(株)三重TLO 技術移転部長 黒淵達史 e-mail;kurobuchi-ad@adp.jiii.or.jp

Tel 059-231-9822、Fax 059-231-9743

三重県科学技術振興センター視察会開催報告

9月25日、10月6日、三重大学創造開発研究センター主催で三重県科学技術振興センター視察会が開催されました。

視察会は、三重県の公設試験研究機関である三重県科学技術振興センター(<http://www.mpstpc.pref.mie.jp/>)の活動を理解し、その連携を強固にし、研究の交流を円滑に行うことで、共同研究等の取り組みや外部研究資金の獲得を目指すなど、産学官連携の推進を目的として行われました。

三重大学の教員、コーディネーター等を参加対象として79名の参加があり、株式会社三重TLOの産学連携コーディネーターも参加しました。三重大学の森野理事・副学長から挨拶と参加者の紹介があり、菅原社会連携部門長から三重大学の産学官連携について説明がありました。三重県科学技術振興センターの各研究部から主な事業の紹介があり、その後各施設を回り、研究内容と設備の説明を受けました。

三重県科学技術振興センターは、総合研究企画部と保健環境研究部、工業研究部、農業研究部、畜産研究部、林業研究部、水産研究部の6つの研究機関で構成されています。視察会は、2回に分けて次のような日程と内容で実施されました。

第1回 9月25日

創造開発研究センター(9:00 発)

総合研究企画部(四日市市桜町 9:50)

保健環境研究部(四日市市桜町 10:10)

工業研究部(津市高茶屋 13:50)

創造開発研究センター(16:30 着)

総合研究企画部は、科学技術振興施策を実施するため研究企画等を総合的にマネジメントするところでした。

保健環境研究部は、企画調整課と疫学研究課、資源循環研究課、微生物研究課、衛生研究課、環境研究課があり、食品や医薬品等の安全性確保、感染症の予防、環境保全のための調査研究や試験検査を行っていました。ガスクロマトグラフ質量分析装置など機器分析装置、微生物測定装置などを視察しました。

工業研究部は、企画調整課と電子・機械研究課、材料技術研究課、医薬品・食品研究課、金属研究

室(桑名市)、窯業研究室(四日市市)があり、様々な開発研究、共同研究でものづくりを支援していました。またISO9001の認証取得で機器開放(有料)をしていました。各研究課を回り代表的な研究内容と研究装置の説明を受けました。

第2回 10月6日

創造開発研究センター(9:00 発)

農業研究部(松阪市嬉野川北町 9:45)

水産研究部(志摩市浜島町 14:00)

創造開発研究センター(17:45 着)

農業研究部は、企画調整課と循環機能開発研究課、作物研究課、園芸研究課、経営・植物工学研究課と茶業研究室(亀山市)、伊賀農業研究室、紀南果樹研究室(御浜町)があり、現在取り組んでいる研究課題について説明を受けました。イチゴバリアフリー栽培施設、廃液再利用式養液栽培装置、生ごみ処理装置、バイテク棟を視察しました。また、畜産研究部と林業研究部からも機関の説明と研究内容について説明を受けました。

水産研究部は、企画調整課、資源開発管理研究課、水産資源育成研究課、水圏環境研究課、地域結集型共同研究課、鈴鹿水産研究室、尾鷲水産研究室があり、研究事業の説明の後、人工衛星情報を用いた海況情報の提供事業、高品質アコヤ貝作出技術開発、イセエビ種苗生産技術開発の施設を視察しました。

視察会に参加して、科学技術振興センターの研究事業や保有研究設備を知ることができ、三重TLOのコーディネート活動にも大変有意義な視察会でありました。



知的財産活用・流通セミナーを開催

既報のとおり9月～10月にかけて知的財産活用・流通セミナーを開催しました。

昨年との違いは2点あり、各開催地域に対する講演者からの提案がされ、それをどう各地域で展開されるかが今後の課題といえます。県科学技術振興センターがまとめた「県知的財産戦略ビジョン」が報告されました。各セミナーでの提案を要約すると以下のとおりになります。



9月20日伊賀：これから高齢化がますます進む中、経験・知識が豊富なUターン組を受け入れ、昔から培った伝統的醗酵技術の底上げを進めて農工複合社会に向けた、高齢者にとって魅力ある地域になることを期待する。(三重大学)

9月21日津：米粉でパンを作るという従来の常識を破った発明に対する妨害に、どう対応したかについてのノウハウを示した。(山形大学)

9月27日鳥羽：ニーズのある企業と共に地元密着型の商品開発を図り、工専の存在価値を向上させていく。(鳥羽商船工専)
大地震に備えるための商店街を中心にした仕組み作りとヤマトタチバナ(市の木)の利用方法。(三重大学)

10月13日尾鷲：三重メディカルバレー研究会との併催
富山県における海洋深層水の利用研究事例が数多く報告され、先行する高知県との差別化を図るため電気分解深層水を実用化し、その効能をデータをとり実証し、特許化した。今では富山県を代表する産業にまでなった。(富山県立大学)
尾鷲海洋深層水の利活用は喫緊の課題で、富山での活動は十分に参考になった。

* 次回開催 日時：12月14日(木)13:15～
場所：鈴鹿商工会議所
講演：名古屋工業大学 知財マネージャー 盛田謙三氏
「企業における知的財産管理」

◆◆◆ 催し物行事案内 ◆◆◆

食品懇話会の開催

三重TLOでは会員の皆様への情報提供・商品開発等の支援を重点課題として活動しています。今回、その一環として食品分野の会員を対象にした懇話会を、下記のとおり開催することにしました。食品業界では「安全・安心・健康」が最近とみに関心を集めていることはご承知のとおりのことと思います。そうした機運もあり、従来にない小規模の中身の濃い懇話会を開催する運びになりました。

今後は食品以外の機械・電気・電子・化学・医療・建設等にまで拡大していく予定ですので、関係各位には奮ってご参加の程お願いいたします。

第一回食品懇話会

(日時) 11月15日(水) 14:00～17:00

(場所) 三重大学創造開発研究センター3階研修室

(内容) 食品の安全と機能

三重大学生物資源学部 青木 恭彦助教授

食品の食感評価について

太陽化学(株)おいしさ科学館 羽木 貴志氏

*以降、年数回の開催を予定しています。

株三重ティーエルオー

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

三重大学創造開発研究センター内

TEL : 059-231-9822

Fax : 059-231-9829

E-mail : mie-tlo@zvtv.ne.jp

http : //www.mie-tlo.co.jp